論文審査の結果の要旨

論文提出者　宮地隆廣

宮地隆廣氏の学位請求論文「先住民運動の規範と政治行動―構成主義アプローチによるボリビアとエクアドルの比較分析―」は、表題にあるとおり、南米ボリビアとエクアドルの高地部および低地部の先住民運動を、構成主義アプローチによって分析した、比較政治学理論にもとづいた論理性と、綿密な現地調査による実証性に富んだ、レベルの高い論文である。

本論文は、序章・本論５章及び終章によって構成されている。序章「問題設定と着眼点」においては、まずラテンアメリカ地域における先住民運動の多様性が語られたのち、その多様性を把握するために、要求、政治参加、制度外的権力獲得という３種類の政治行動に注目するという立場を打ち出している。そして、研究対象はエクアドル高地・低地、ボリビア高地・低地という２国４地域の先住民運動、そのうちでも前出４地域の地域レベルの組織、およびこれらの組織が結成する全国レベルの組織であるとする。理論的枠組みは構成主義であり、そのうちで本論文が注目するものとして、先住民運動の行動の方向性を規定する「規範」を取り上げている。

第１章「フレームワーク　実証的構成主義」では、論文の分析枠組みが検討されている。まず筆者は、対象とするボリビア・エクアドル両国の先住民運動に関する先行研究を批判的に検討し、他者との相互作用の中で変化する規範に着目する必要性を確認せんとする。すなわち、規範に着目しない先行研究は、先住民運動がみせた多様な政治行動を的確に捉えていないこと、そして規範に注目するこれまでの研究も、やはり多様な政治行動を捉えきれていないと同時に、規範が多様な政治行動を規定する重要な要因であることに関して論証を尽くしていないと述べる。そして、こうした先行研究への批判を踏まえ、構成主義の理論的前提や分析の手順を明確にする。

第２章から第５章までは、４地域に分けた事例分析が展開され、具体例に即して著者の理論的立場である構成主義の有効性が確認されている。まず、第２章「ボリビアⅠ　高地先住民運動」では、選挙参加と制度外的権力獲得を早くから実行したことを特徴とする同地域の先住民運動は、政治権力の獲得に強い意識を持っていたが、ゲリラ活動とパラレルな統治機構の確立活動がともに失敗に終わると、選挙参加こそ先住民がとるべき行動であるという規範が確立されたとする。

第３章「ボリビアⅡ　低地先住民運動」においては、選挙参加が遅れると同時に制度外的権力獲得行動をとることもなかったボリビア低地先住民運動は、従来から政党に不信感を

もち、政府への要求運動を重視する姿勢をとってきたが、運動の規模を広げる過程で選挙参加を認め、要求活動の相手である政府を否定する制度外的権力獲得をめざすことはなかったとする。

第４章「エクアドルI　高地先住民運動」では、政党政治に対して強い不信感を持ってきたために、先住民議会と称するパラレルな議会制度の確立をめざした先住民運動が、先住民議会開催が挫折した後に選挙参加を認めるも、制度外的権力獲得活動も同時に展開されたとされている。

第５章「エクアドルII　低地先住民運動」では、選挙に早くから参加すると同時に制度外的権力獲得もめざした同地の運動は、当初政府に対する要求運動を行動の原則としていたが、地域の開発に直面して政治規範を変更し、高地先住民との連携を強めて、上記の選挙参加と制度外的権力獲得を同時にめざすことになったという評価を下している。

そして、終章「結論と含意」においては、事例分析の結果をまとめ、構成主義の説明能力が評価されている。そして最後に、ラテンアメリカ先住民運動の方向性と、民族運動と民主主義の関係についての示唆を行って論文を締めくくっている。

本論文は、ラテンアメリカの先住民運動に関する出色の研究であり。この運動について現地においてインタビューを精力的に行うと同時に、新聞などに掲載された言辞を体系的に収集している。このようなデータから抽出された言葉として語られる先住民運動の規範を、実証的・詳細に解析したことは、これまでにない学問的貢献であり、審査員全員から高い評価を受けた。この実証性と同時に、手順を尽くした理論への検討をもとにして、論文全体の論理的整合性が極めて高いと評価する審査員が多数を占めた。

しかし、この論理性に対する評価と裏腹に、方法・理論にこだわるあまり、先住民運動の実際の姿を豊かに描くことの障害になったという意見や、著者が用いる「規範」という概念より「フレーム」がよりふさわしいという意見もあり、審査員との質疑は理論・方法の部分に集中した。そしてまた、著者が収集した分厚いデータを用いてラテンアメリカ現代政治をもっと語ることができたはずなのに、論文がそちらの方向に向かなかったことを惜しむ意見も述べられた。

しかしながら、このような審査員の意見も、比較政治学の方法によるラテンアメリカ研究への大きな貢献という論文全体の価値を否定するものではない。故に、審査委員会は全員一致で、宮地隆廣氏に博士（学術）の学位を授与するにふさわしいと認定する。